

## 自由学園初等部3・4年 学びの発表会「水ってなんだろう？」

田嶋 健人 真中 昭典

学びの発表会の趣旨を踏まえ、①児童の主体性が発揮される②児童の声を中心として授業をつくっていくという、2点を意識し実践してきた。どの段階においても、児童の振り返りを重視し、振り返りを参考にカリキュラムを作りだしていき、子どもたちの実情に合わせて、課題や問いの設定を行った。児童の振り返りから、意識変容が見られたこと、終了後に普段の授業態度にも変化が見られた。一方で、児童の水に対する視野をさらに広げること、児童一人一人の活動を支えるための工夫がさらに必要となることがわかった。

### I. はじめに

「学びの発表会」の趣旨を踏まえ、①児童の主体性が発揮される②児童の声を中心として授業をつくっていくという2点を目標として置いた。

①については、発表会全体のテーマと合わせて設定した。児童が、主体的な学習を進めることができるようにするためにも、調べ学習や制作物を自力で進められるような評価の設定や指導を行った。

②については、教師の設定したテーマに子どもたちを当てはめていくのではなく、リフレクション（振り返り）を通じて子どもたちの考えや感情を捉え、それをもとに指導内容や問い柔軟に変更したり追加したりしながら進めてきた。

本単元では3・4年生合同で学習を進めた。3・4年生では国語、社会などにおいて身につけさせたい力や技能が関連づけられてる部分も多く、合同で行うことによって、教え合いや学び合いが生まれ、よりよい学びとなることを目指した。

また、これまで、4年生「川の勉強」「学校の水道調べ」「2年生川の生きものの勉強」など、水に関連した学習教材を活用して授業に活かしてきた経験もあるため、今回、それらを活かすことのできることを目指した。

### II. 実践の概要

#### 1. 児童観

##### (1) 3年（男子14名、女子15名、計28名）

学習に向かう気持ちの高い児童が多い一方で、おとなしく、授業中の発言や意見交換に消極的な様子も見られる。本単元を通して、もともと持っているよさをいかすためにも、自身の意見を表現する力を身につけ、積極的な姿勢を育みたい。

##### (2) 4年（男子14名、女子18名、計32名）

学習に対する興味関心が高く、個々の興味もはっきりとしている。その良さをいかすためにも、この授業の中で「教える」、「伝える」といった活動を通して、一人一人が関心の高い内容について、的確に伝えたり、他者目線でわかりやすく表現したりする力を身につけさせたい。

#### 2. 学習観

##### (1) テーマ設定

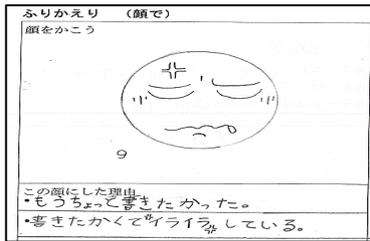
児童一人一人にとって興味のあるテーマになるよう考え、児童に身近でありつつ、理科や社会、国語・数学といった様々な教科と関連付けられる、「水」を探究のテーマとして設定することとした

##### (2) リフレクション（振り返り）

授業のどの段階でも、リフレクション（振り返り、図1）を実施した。児童のリフレクションを通して、子どもの様子（その時の思いや、気持ち）を知ることで、教える教師側はそれを活かし、次に必要な手立てについて検討し、その都度カリキュラムに反映させながら進めていくことができた。前もって決められた道を子どもたちに歩ませるのではなく、子どもが進みたい道を教師がサポートし、背中を押しながら学習や探究が進んでいくようにした。

また、リフレクションを効果的にするため、「水ってなんだろう？」という問いを設定し、この問いを何度も問い直し続けた。問いに対する応答の変化（もしくは変化のなさ）が見えることで、いつでも「水」に対する自身の

意識の変容に気づくことができ、自己の学習を見直すために活用することもできると考えた。



(図1) 児童のリフレクションの例

### III. 学習の流れ

#### 3. 1学期

1学期はまず、テーマである、「水」について興味関心を持つことを第一に置いた。次に、初めて人前で一人一人が（もしくはそれに近いくらい少人数で）調べたことを報告することになる、2学期の発表会へ向けて、「調べ方」「発表の仕方」を教科書の内容も活かしながら学ぶことの2点を重視して行った。

興味関心を持ってもらうため、テーマ設定の際に、「児童にとって身近なもの」ということを重視してテーマを決めたが、「身近なもの」から、「興味のあるもの」「調べたいもの」といったような、「学習の対象」としての興味へと変える必要があった。発表会へ向けては、2学期にある学習発表会を公表の「本番」として置き、1学期はまず、調査や発表に必要な技術を学び、それ以降の学びがさらに豊かになるよう計画した。

##### (1) 水への興味関心、水の概念について知る

5、6名のグループに分かれ、「水」と聞いて思いつくことを付箋へ記入し、その後グルーピングする活動を行なった。そして、自身の興味のあるテーマ・問いを見つける活動を行なった。その中で、興味を問いへと変えることに苦勞する児童もいたが、水と、自分自身や生活との関係を考えさせるよう工夫した。また、子ども同士の対話からヒントをもらうような様子も見られた。その結果、釣りや、海川で遊んだ経験から問いを設定したり、自身の生活の中から水道（お風呂・トイレなど）に関連させて、問いを設定したりする姿が見られた。

#### (2) グループ学習

問いを設定できた後は、2学期の本番に向けた練習として、問いを設定し調べて発表するというサイクルを実施し、その中で必要な力をつけていくこととした、

まず、ワークシートを作成し、問いから始まる、調べ学習の手順を身につけられるようにした。また同時に、国語の時間に学ぶ、「出典」「文章の組み立て」といった単元を「水の学び」とつなげ、調べ学習に必要なことを身に付けていった。ここでは、4名から7名程度のグループに分けて行った。グループ活動においては4年生が中心となり対話を進める中で、3年生も発言しやすい雰囲気が見られ、3、4年生合同で学んでいることによる相乗効果も見ることができた。

#### (2) 発表

2学期の発表会の練習として、1学期に調べたことを小ホールで発表する機会をつくった。発表を作る、そして発表するという通して発表に必要なスキルの獲得を目指した。これまで、教室内で、発表したり、自分の意見を述べたりする機会は経験してきた児童であるが、発表について、話し方、声の大きさ、発表物の見せ方などについて追及して考えてきた経験はなかったため、今回の発表会がよいきっかけになり、深く考える子どもは増えてきた。また、小ホールでの発表では、保護者の方にも見に来ていただき、学習の様子を見て頂けたことも収穫となった。

今回の発表会では、発表の方法を1種類（紙芝居型）に限定し、発表方法から考えるというのではなく、子どもたちが発表作成や発表そのものに集中できるようにした。

#### (3) 1学期の振り返り

1学期の発表会を終え、改めて「水ってなんだろう」という問いを子どもたちに問いかけると、「命に関わるもの」「大切なもの」といった、水の良い側面に着目する子どもたちがほとんどであり、かなり偏った結果となった。2学期に向けて調査スキルを身に付けることを引き続き進める一方で、子どもたちが、水の多様な側面に目を向けられるよう工夫しなければならぬことがわかった。

夏休みには1学期に身につけた調べ学習の力を活かして、個人的な問いを調べる課題に取り組んだ。改めて個人の問いに戻すことで、2学期のさらに個人の学習を深く進めていくための準備期間とした。

4. 2学期

まず、夏休みに一人一人がした学習を見合った。それぞれ、自身の興味のあるテーマについて調べてきた様子で、発表し合うことで、お互いに刺激しあって学習に向かうことができそうなよい雰囲気づくりにつながった。

(1) 知識を拓げる活動

2学期は1学期のふりかえりを踏まえ、水について知識を拓げるために、①「海洋ゴミ」②「水災害」③「東久留米市の水」④「下水処理の仕組み」⑤「バーチャルウォーター」⑥「世界の水事情」などの様々な授業を実施した。「水は大切なもの」という考えがほとんどだった1学期から、水のネガティブな面にも目を向けたうえで子どもたちが自分なりの考えをそれぞれみつけようと取り組めるよう工夫した。

(2) 調べ学習と表現方法をつなげる

2学期は、「絵が得意」「工作が好き」といった子ども一人一人の思いを活かせるよう、「発表会」での発表方法を選ぶことができるようにした。教師がいくつかの発表方法を提案し、その中から自身のやりたい方法を選択・決定できるようにした。

(3) 発表へ向けての活動

1学期と比べて、少ない人数のグループ(2から5名)に分けて活動した。作成が主体的に行えるようループリック(図2)と呼ばれる評価基準を作成し、子どもたちに提示した。ループリックがあることで、自分の作っているものや発表がどれくらい進んでいるのか、自分でわかるようになってきている。そのため、活動をしながら、次にすることを考えられるため、主体的に考え工夫しやすくなった。教師も作業の中では具体的な指示を控え、ループリックを観たり、グループ間でお互いに見せ合ったりするよう促した。子どもたちもグループ内やグループ間で話し合いを重ねたり、見合ったりしながら和気あいあいと作成を進

めていった。ループリックがあることで自然と同じ方向を向いた作成時間が続いた。

「水の学び」成果物(作品・動画など)の詳細・ふりかえり

① ありかえて、しもし(○や△)をつけよう。

	◎	○	△
問いへの答えを書く	問い「水ってなんだろう」に対するグループや自分の答えを、 <u>「何となく」で答えを書いた。</u>	問い「水ってなんだろう」に対するグループや自分の答えを、 <u>表現している。</u>	問い「水ってなんだろう」に対するグループや自分の答えを、 <u>表現していない。</u>
見方・視点を書く	グループや自分の「水の見方・視点」を、 <u>「何となく」で答えを書いた。</u>	グループや自分の「水の見方・視点」を、 <u>表現している。</u>	グループや自分の「水の見方・視点」を、 <u>表現していない。</u>
これから学習をもとにする	「水ってなんだろう」に対する <u>「学習から何を学ぶか」を明らかに</u> 答えられる。	「水ってなんだろう」に対する <u>「学習から何を学ぶか」を</u> 答えられる。	「水ってなんだろう」に対する <u>「学習から何を学ぶか」を</u> 答えられない。

② 表現のしかた、できるところにしもしをつけよう。

全員でとても詳しい(レベル1)	ちょうどいい長さまで発表する。	聞く人の話をよく発表する。	ちょうどいい長さまで発表する。	言葉づかひに気をつけて発表する。
さめかにできる(レベル2)	質問に答えられる。	質問に答えて、伝え方を考えることができる。	聞く人、話す人に発表できる。	遠くを話しても聞いてもらえることができる。

— 星 名 緒 —

(図2) ループリック

ここでは、1学期と比べて、より活発に話し合いや作業が進んでいる様子が見られた。4年生が対話の中心を担うことは変わらないが、4年生が計画を立て、活動がうまく進むよう工夫することができるようになってきたことが大きい。また、3年生は、4年生と学習と共にするることによって、活動の仕方を経験し、学ぶことができたため、ただ話を聞いているだけではなく、自分のしたいことを伝えたり、作業内容をきちんと理解したりして、取り組めるようになった姿が多く見られるようになった。

5. 発表会当日

学びの発表会当日は、作ったものの前に子どもたちが立ち、説明する形で実施した。(写真1)発表会では 来場した保護者、他学年・同学年の児童、その他来場者に対して、同じ発表を繰り返すことで、発表会中にも説明を付け足そうとしたり、工夫を加えようとした姿が見られた。発表会本番も学習の一部として、学びに変えている姿が見られた。

また、「10回も発表したよ」「いいねって聞いてもらえたよ」といった声も子どもたちから上がった。発表会に来ていただいた方々からも多くの力をもらって発表し、自信を持って子どもたちは学ぶことができたようだ。



(写真 1) 発表会当日の様子

#### IV. 考察

発表会とそれにつながる学習を通して、3、4年生ともに、普段の授業の中でも変化が見られた。授業の中でも子どもたちが積極的に意見を発表する場面が増えたり、友達の意見を尊重し、よく聞こうとする姿勢が見られたりするようになった。また、まとまった文章を書く力もついた。国語以外で文章を書く機会、自分の意見をまとめる場面があったことで、さらに国語の力が身に付いたと考えられる。また、理科や算数など、担任以外が担当している教科の教師からも「ノートの取り方が変わった」という声上がるなど、さまざまな教科でよい変化が見られたようだった。

#### V. 課題と展望

3、4年生が今回の「水の学び」をさらに深めたり、個々で学んだりしたことを活かして、それぞれ次の学年に進んでの学習を進めてほしいと考えている。また、水という身近なものに対して一度立ち止まって深く考えた経験から、身の回りのものをよく見て、よく考えることの大切さや面白さに気づいてくれたらと思う。

#### VI. 参考文献

- ・西岡加名恵「教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか—」, 2016, 図書文化社.
- ・国際バカロレア機構「PYP の作り方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」, 2016.